

## 聞き手のふるまいと会話の流れ

### — 応答詞「ほんと」と「そう (なんだ)」の果たす役割 —

鈴木 佳奈, 井佐原 均

独立行政法人 情報通信研究機構 (NICT)

{ksuzuky, isahara}@nict.go.jp

## 1. はじめに

従来の対話研究・談話分析では話し手の発話行動が中心的に取り上げられてきたが、最近では、聞き手のふるまいも、話し手の発話の組み立てや話の流れに積極的にかかわっているということが定説になりつつある。例えば、話し手が自分の経験などを語ろうとしたとき、聞き手がその内容をすでに知っているかどうか、また知らない場合にはその語りに関心を示すかどうかは、そのあと話し手が語りをどう進めるかを決める上で重要な要因となる (Sacks 1974, Goodwin 1982)。聞き手の知識や関心の有無が端的に現れるのが、聞き手が差し挟む、いわゆる「あいづち」である。

一般にあいづちは、単に聞き手が聞いていることを示す、どちらかといえば受動的なものとして捉えられがちである。しかし、どんな形式のあいづちを選択するかによって、聞き手は話されている事柄について知識の有無や関心の度合いなど、さまざまな認知状態を示すことができる (Tanaka 2002)。本研究では、あいづちの一種としてひとまとめに扱われてきた「ほんと」と「そう (なんだ)」(以下「そう」と表記) という応答詞を取り上げ、その出現位置および働きの違いを比較しながら検討することで、会話の流れに対する聞き手の関与の一例を示す。

## 2. 分析対象, 分析方法

本研究で言う「ほんと」と「そう」は、以下のようなヴァリエーションを含む種々の表現群を指す<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 「ほんと」も「そう」も、応答詞だけではなく、同意を表す表現にもなる。

**ほんと** ほんと, ほんとに, ほんとですか, ほんま, ほんまに

**そう (なんだ)** そう, そうなんだ, そうなの, そうか, そうですか, そうなんですか, そうなん, そうなんや<sup>2</sup>

「ほんと」と「そう」は文法的には全く異なるカテゴリーに属する語彙である。ところが、次の例が示すように、談話の中では応答詞として同じような場所に出現しうる。

(1) ((独り暮らしをしている E のボーフレンドについて))<sup>3</sup>

1E: だってだいぶ:-(. ) だいぶなるよ,

2E: [独りなの。

3J? [(ふんふん)

→4S: あほんとに [:

→5I: [そうなんだ:。

(a) A: うそ: (b) A: あした試験?  
B: ほんと。 B: そう。

このような同意表現としての「ほんと」「そう」は本研究の対象とは異なる現象である。

<sup>2</sup> これらの表現には、「気付き」を表す応答詞「あ」(Tanaka 2002, 細間 2005), 「あら」, 「え」などが伴うこともある。

他に「そう」グループに含めうるものとして「そっか」が考えられるが、予備的分析の結果、「そっか」は「そう」と出現位置およびその働きが異なっている可能性が示唆された。そのため今回は分析対象から除外した。

<sup>3</sup> 事例に使用する転記記号は以下の通りである。

? 上昇イントネーション  
。 下降・終了イントネーション  
, 継続イントネーション  
あ: 引き延ばされている音  
あ- 途切れて不完全な音  
(あ) 聞き取りが確定できない音  
(.) 0.2 秒以下の沈黙  
(1.0) 0.2 秒以上の沈黙 (括弧内は秒数)  
[ 重なっている複数の発話  
( ( ) ) 注記 → 注目する発話

この例で、話し手Eの発言に対して反応として聞き手SとIがそれぞれ「あほんとに：」、「そうなんだ：」と言う。談話の同じ位置に出現するということは、この二つの応答詞は互換可能だということを意味する。しかし、だからといってこれらがまったく同じ働きをしているとは限らない。

本研究が依拠する会話分析では、ある発話の働きを二つの側面から記述する。第一に、当該の発話がどの位置に出現するか、すなわち、どのような発話に対する応答として働くのか、という側面。第二に、該当の発話にどのような発話が後続するのか、すなわち、その発話がその後の話の流れにどのような影響を与えるのか、という側面。この二つの側面について、実際の対話（日常の電話会話、対面でのおしゃべり、インタビュー、新聞販売店への電話）から「ほんと」と「そう」が現れる事例を収集し、二つの応答詞の間に違いが見られるかどうか、分析を行った。

### 3. 分析

#### 3.1 「ほんと」と「そう」の出現位置

事例(2)と(3)は、それぞれ「ほんと」と「そう」の出現例である。

(2) ((Yが苺摘みに行った話。))

- 1K: 食べた?  
 2Y: 食べた。おいしかったよ。  
 →3K: ほ：ん [と  
 4Y: [ん：, で：また苺ジャム作ったの。  
 →5K: ほんと, [(それで) 取ってきたの?  
 6Y: [ん  
 7Y: そう。

(3) ((ベネチアに行ったというSに対してIがしきりにうらやましがる。))

- 1E: あれ, 行ったことないの。  
 2 (0.4)  
 3I: ローマはあるよ。

- 4I: ロー [マとね：,  
 5E: [あ：じゃなくてあの,  
 6 (0.4)  
 7E: ベネチア。  
 8I: ベ- ん：それはない。  
 →9E: そう  
 10 (0.2)  
 11S: む：ちゃ [感動するねえ。(.) なんか。  
 12I: [行きたかったんだ (けど)。

このような事例から「ほんと」と「そう」の生起位置の特徴をまとめると、以下の3点になる。

- ・「ほんと」「そう」ともに、なんらかの情報を相手に伝えることを主目的とした「情報伝達発話 (informing)」(Heritage 1984) に対する応答である。日本語では情報伝達発話は終助詞「よ」でマークされることが多い。情報伝達発話には、事例(2)の4~5行目のように、話し手が自発的に情報を与える場合と、1~3行目や事例(3)のように、そもそも聞き手の質問に答える形で情報が引き出される場合とがある。
- ・「ほんと」は原則的には情報伝達発話に対する第一の応答である。「そう」は、「ほんと」や他の応答詞、笑いなど第一の応答に後続することが多い。
- ・「ほんと」が受け取りを示す情報は受け手にとって新規なもの/思いがけないものであるのに対し、「そう」の場合必ずしも新しい情報である必要はない。

情報伝達発話の後には「ほんと」と「そう」どちらも現れうるが、その他に、「ほんと」のみが見られる限定的な生起環境として、自分の見解に対立する見解が述べられた直後、というものもある。事例(4)がその例である。

(4) ((次の日の天気について))

- 1Y: 今さ：外出たらさ：, [す：ごい風が：また-  
 2A: [うん

3Y: 出てきてさ:,  
 4 (.)  
 5A: あ, ほんと[:.  
 →6Y: [ん:, 雲もあるしあした:,  
 →7Y: (0.2) へ: たすつとあしたもう雨  
 →8Y: 降つかもね。  
 9 (0.5)  
 →10A: かな:, でもさっきの天気よほう: でもよ-  
 →11 あしたはすごいいい天気なんつってたけど:。  
 12 (0.2)  
 →13Y: ほんと:。でもなんかす: がい tss-  
 →14Y: 寒くってさ,  
 →15A: あら:, ほんと: ?  
 16Y: ん:  
 17Y: ま, 日曜日: : ほら崩れるってゆってたの  
 18A: ん: [ん: ?  
 19Y: [あしたからもう崩れんじやないのかな。

外の様子を見て次の日の天気は悪そうだという Y (6~8 行目) に対して, A は天気予報では「すごいいい天気なんつってた」と報告する (10~11 行目)。自分とは違う見解が相手によって明示的に述べられたとき, Y (13 行目) も A (15 行目) も「ほんと」で相手の見解を受けているのがわかる。

以上の諸特徴から, 「ほんと」は「聞き手にとって新しい, あるいは想定していなかった情報 (ニュース) の受け取り」を表し, 「そう」は「情報一般の受け取り」を表す応答詞であると区別することができる。

### 3.2 「ほんと」出現直後の会話の流れ

3.1 の事例(2)や(4)に見られるように, 「ほんと」が出現した直後の会話の流れには大きく二つのパターンがある。一つ目は, 「ほんと」の受け手 (=情報伝達者) が, 「ん:」などで先の情報を追認したあと, 間髪入れずにその情報伝達発話を拡張するというもの。例えば, 前で伝えた情報をもっと詳しく説明したり, 理由づけをしたり, また, 語りの場合には語りを先に進め

たりする。二つ目のパターンは, 「ほんと」の産出者 (=情報の受け手) が, 伝えられた事柄について質問・追及したり, 自分の見解を擁護したりするもの。どちらのパターンにしても, 結果的に, 伝達された情報をめぐる話題がその後も続くことになる。言い換えれば, 「ほんと」が産出されたあと, 情報伝達者も受け手も現行の話題を続けようとしているということである。すなわち「ほんと」は, 情報の受け手がその事柄についてさらに話を聞く用意があることを示し, 話題の継続を促している合図である。

### 3.3 「そう」出現直後の会話の流れ

一方「そう」の場合, 「ほんと」と対照的な会話軌道を通る。

(5) ((夫 H は妻 W に, もうすぐ帰宅する旨電話を入れる。))

1H: あ, (0.6) これから帰るんだよ:  
 2W: はい:。(0.4) 何時ごろ: ?  
 ((省略))  
 3H: やっぱりそのくらいかかるにじ g  
 4H: 今何時だ: ?  
 5 (.)  
 6W: 今? 今い- いちじ半ごろ?  
 7H: あじゃにじ半過ぎるな:。  
 →8W: そう。  
 9 (0.2)  
 →10H: う: ん  
 →11W: で, 食事は?  
 12H: 食事いらな: い。

「そう」の受け手が「ん:」などで情報を追認するまでは同じであるが, そのあと自発的に話を続けようとしな。また他の事例では, 「そう」の産出者が続けて伝えられた情報に関してまとめるようなコメントを言うというパターンも見られた。

「ほんと」との対比で特徴的なのは, 「そう」への応答として情報の追認が行われたあと, あ

まり間を置かず新しい話題が導入されていることである。事例(3)では、Sがベネチアに行ったことが語られていたのだが、その語りが終わらないうちにIもベネチアに行ったことがあるのかどうか確認するやりとりが交わされ、話が脇道に逸れた。Sが再び主導権をにぎろうと語りを再開するのは、情報の受け手(E)が呈した「そう」に短い間が続いた直後である(11行目)。同様に事例(5)でも、「そう」(8行目)と「う：ん」(10行目)を契機にHの帰宅時間から食事の準備の必要性へと話は移る。すなわち対話の参加者は、「そう」の出現を受けて現行の話題を協働的に終了させようとする。

以上より、「そう」は情報の受け手がその事柄についてこれ以上積極的に聞くことはないと考えていることを示しているものであり、話題の収束を促している合図であると言える。

#### 4. 考察

以上の分析をまとめたものが図1である。

図1に示された傾向は、データベースとして使用した様々なタイプの対話に共通して見られた<sup>4</sup>。これは、対話の中での「ほんと」と「そう」の働きが、その使用者の属性や個性、好みによって変わるものではないことを示唆している

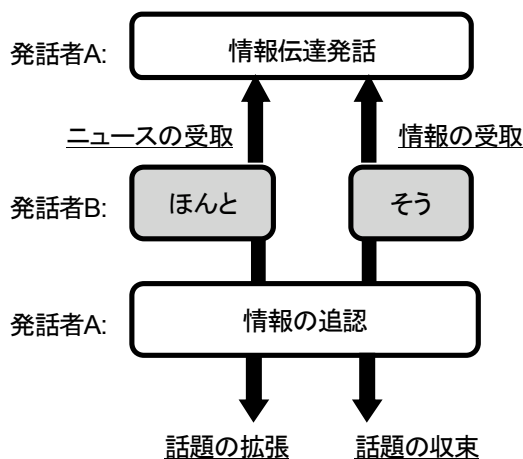


図1：「ほんと」と「そう」の働き

<sup>4</sup> 唯一、新聞販売店への電話の中では「ほんと」がほとんど出現しないという偏りがあった。

考えてもよいだろう。

このような二つの応答詞の働きの違いが対話の中で使用者にそれと認識されることはほとんどないと思われる。むしろ、一般には、情報の受け手の関心の有無や性格を表すものとして理解されているのではないだろうか。例えば「ほんと」は、局所的にはその話題に対して関心を持っていることを伝えることができる一方で、それを多用する人は「疑り深い人」「批判的な人」という印象を持たれるかもしれない。あるいは「そう」と応答された語り手は、聞き手が意図していないにもかかわらず十分な関心を払ってもらっていないと不満を感じるかもしれない。

あいづちのようにほとんど無意味に見える短い応答も、会話の流れを方向付けるのに貢献している。話し手は聞き手のささいなふるまいを注意深くモニターし、そこに様々な「意味」を見いだしているのである。

#### 参考文献

Goodwin, C. 1982. *Conversational Organization: Interaction Between Speakers and Hearers*. Academic Press.

Heritage, J. 1984. A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press, 299-345.

細馬宏通. 2005. 「対話における応答詞『あ』の機能：発し手にとっての「新規情報」は相互行為にどう利用されるか?」『社会言語科学大会第16回大会論文集』67-70.

Sacks, H. 1974. An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In J. Sherzer and R. Bauman (eds.) *Explorations in the Ethnography of Speaking*. Cambridge: Cambridge University Press, 337-353.

Tanaka, H. 2002. Sequential and prosodic analysis of response particles in Japanese conversation. *Paper presented at the International Conference on Conversation Analysis, Copenhagen University, Denmark*